

修士論文概要

大学生の共感性と友人関係動機づけが向社会的行動に与える影響

吉澤 雅子

1. 問題と目的

近年、インターネットやソーシャルメディアが急速に発展している。それに伴い、対人関係や友人関係についても変化がみられる。大学卒業後の社会参加において、個人、社会、他者との相補的な関係性が問われる。本研究は、新たな対人関係を構築したり、これまでの関係を維持したり、より良いものに発展させるための手段として向社会的行動をとりあげた。ここでの向社会的行動とは、Mussen & Eiserger-Berg(1977)による、「外的報酬を期待することなしに、他人や他の人々の集団を助けようとする、こうした人々のためになることをしようとする行動」とする。

松永 (2012) は、共感性と向社会的行動に高い相関があり、相手の感情を共有し、その人が何を求めているかわかる人ほど向社会的行動をとりやすいと述べている。また、岡田 (2005) は、友人や友人関係に対する感情や認知によって行動が規定される過程は、動機づけの過程であると考え、友人関係に対する動機づけが友人への向社会的行動に影響を及ぼすと述べている。本研究では、向社会的行動への共感性の影響に対して、その質的な側面を左右する具体的な対人場面であると思われる友人関係動機づけとの関連に着目した。

本研究では、大学生を対象に共感性と友人関係動機づけが向社会的行動へ与える影響に対しての仮説を検討することを目的とした。大学生活における対人関係のあり方は、学生生活そのものに大きな影響をもたらすとともに、将来の職種に必要とされるコミュニケーション能力、共感的能力の育成など、重要な能力の育成にも影響すると考えられる。共感性が良好な友人関係を築く動機づけにどのように影響を与え、向社会的行動を導いてい

るのかを検討することは大いに意義があるといえるだろう。

<仮説>①共感性において、認知的側面である視点取得と、情動的側面である他者指向的反応が友人関係動機づけの同一化と内発に有意な正の影響を与えている。②友人関係動機づけの同一化と内発が向社会的行動に有意な正の影響を与えている。③向社会的行動において性差が見られる。

2. 方法

(1) 倫理的配慮

調査協力を得られる人に対し、無記名で回答を求めた。個人のデータの扱いについて実施者が口頭で説明し、かつフェイスシートに同様の文言を記載した。

(2) 参加者

A 県の大学生および大学院生 136 名 (男性 60 名、女性 76 名) を分析の対象とした。

(3) 手続き

調査の期間は 2021 年 6~7 月、大学の講義時間を用いて、集団場面による自由回答法の質問紙調査を行った。使用した尺度は以下の 3 尺度である。①多次元共感性尺度 (MES) (鈴木・木野、2008) 視点取得、想像性、他者指向的反応、自己指向的反応、被影響性の 5 因子 5 件法、②向社会的行動尺度 (大学生版) (菊池、1988) 向社会的行動の 1 因子 5 件法、③友人関係への動機づけ尺度 (岡田、2005) 外的、取り入れ、同一化、内発の 4 因子 5 件法。全ての重回帰分析は、強制投入法で行った。

3. 結果と考察

各尺度における向社会的行動の性差を検討した結果、有意な性差は認められず仮説③は

支持されなかった。

向社会的行動を従属変数、多次元共感性と友人関係動機づけを独立変数とした重回帰分析を行った。その結果を Table.1 に示す。全体では、他者指向的反応、視点取得、外的が正の、被影響性が負の影響を与えていた。男性は、他者指向的反応、想像性、視点取得が正の、被影響性、内発が負の影響を与えていた。女性は、他者指向的反応、外的、同一化が正の、被影響性が負の影響を与えていた。これらの結果、女性は同一化のみで有意な正の影響を与えていたことから、仮説②は一部支持された。

他者の情動に共感しつつもそれに巻き込まれず、他者の立場に立ち理解を深めることから向社会的行動を行う働きかけが起こることが明らかになった。

Table.1 向社会的行動の重回帰分析

| | 全体(N=136) | 男子(N=60) | 女子(N=76) |
|------------------------|-----------|----------|----------|
| 重相関係数 (R) | .664 | .767 | .602 |
| 決定係数 (R ²) | .442*** | .589*** | .363*** |
| 標準偏回帰係数 | | | |
| 被影響性 | -.312*** | -.293** | -.324** |
| 他者指向的反応 | .388*** | .380* | .421** |
| 想像性 | .106 | .273* | -.087 |
| 視点取得 | .207* | .287* | .089 |
| 自己指向的反応 | -.057 | -.114 | .063 |
| 外的 | .189* | .035 | .368** |
| 取り入れ | .042 | .050 | .060 |
| 同一化 | .238 | .361 | .390* |
| 内発 | -.219 | -.493* | -.244 |

*p<.05 **p<.01 ***p<.001

友人関係動機づけ尺度の各下位尺度を従属変数、多次元共感性の各下位尺度を独立変数とした重回帰分析を行った。これらの結果、全体と男女共に共通して共感性の他者指向的反応が、友人関係動機づけの同一化と内発に、視点取得は全体と男性の内発に有意な正の影響を与えていたことから、仮説①は一部支持された。

本研究では、共感性の様々な側面があり共感性が高ければ向社会的行動が高いということではなく、多次元的な認知的側面・情緒的側面が自己に向かうか、他者に向かうかによ

って異なる影響を与える結果となった。

4. まとめ

適切な向社会的行動には、他者理解と共感性の両方が必要であり、共感性のない他者理解はいじめや攻撃行動、あるいは虚偽や詐欺行為などにつながる危険性がある。向社会的行動について考えるうえで重要な事項として、「どのように助けるか」という認知がある。同じ場面、同じ相手であっても、行為者が選択肢として助け方を複数持っていれば、様々な状況に応じた行動を選び取ることができるようになり、今後の大学生活や対人関係の形成や維持に重要であると考えられる。

今後の課題として、向社会的行動について個人がもつ特性や他者評価や観察法などを用いて実際の行動などを検討する必要がある。また、友人関係への動機づけが具体的な友人への働きかけに及ぼす影響という因果関係についても、検討すべきであるといえるだろう。

5. 引用文献

- 菊池章夫.(1988).思いやりを科学する：向社会的行動の心理とスキル. 川島書店
- 松永 健.(2012).思いやり行動の精神力動：共感性と自意識を中心に. 臨床心理学研究 10,99-113.
- Mussen,P.&Eisenberg-Berg,N.(1977).Roots of caring,sharing,and helping:The development of prosocial behavior in children.Freeman.(菊池章夫(訳)1980.思いやりの発達心理. 金子書房)
- 岡田 涼.(2005).友人関係への動機づけ尺度の作成および妥当性・信頼性の検討：自己決定理論の枠組みから. パーソナリティ研究,14,101-112.
- 鈴木有美・木野和代.(2008).多次元共感性尺度(MES)の作成：自己指向・他者指向の弁別に焦点を当てて. 教育心理学研究 56,487-497.